

松浦武四郎

生誕190年 没後120年 6回目 of 北海道調査から150年

記念事業 オープニングイベント

2008年2月23日(土)

松阪市民文化会館

プログラム

1. 松阪しよんがい音頭と踊り
「松浦武四郎一代記」
松阪しよんがい音頭と踊り保存会
2. 実行委員長あいさつ
3. 松阪市長あいさつ
4. 松浦武四郎を知る!
小野江小学校6年生による群読「松浦武四郎」
5. 松浦武四郎を語る!
磯里博巳さんによるトーク「アイヌ民族から見た松浦武四郎」
6. 松浦武四郎を偲ぶ!
鶴川アイヌ文化伝承保存会
国指定重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」



松浦武四郎生誕190年等記念事業とは

松阪市では、平成20年(2008)2月に、郷土の偉人松浦武四郎が生誕190年、没後120年、6回目の北海道調査から150年を迎えることから、平成21年(2009)2月までの間、記念事業を実施いたします。

松尾芭蕉、本居宣長と並んで三重県を代表する偉人の一人松浦武四郎は、江戸時代後期の旅行家・探検家、作家、出版者、学者など、その業績は多岐にわたり、アイヌ民族と交流を深めたヒューマニストとしても、近年その評価が高まりつつあります。

この記念事業では、こうした武四郎の魅力を市内外へと発信し、さらに多くの人びとに知っていただくとともに、松阪市の文化のみならず、教育・観光・産業・まちづくりにおける取り組みへとつなげていきたいと考えています。

そして、市外へ向けて松阪を大きくPRしていくとともに、みなさんに地域への誇りや愛着を感じていただくことで、薫り高い文化の創造へとつながる事業を展開してまいりたいと思います。

個性豊かな地域づくり、心豊かな人づくり、武四郎にちなんだ新しい文化の創造へと広げ、生誕200年を迎える平成30年(2018)につなげていくためにも、みなさまのご理解とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

松浦武四郎のメモリアルイヤー

1818年 松阪市小野江町で生まれる
1858年 6回目となる北海道の調査を行う
1888年 71歳で亡くなる

2008年 生誕190年、没後120年、
6回目の北海道調査から150年
2018年 生誕200年、没後130年



武四郎まつりマスコットキャラクター
たけちゃん

松浦武四郎を活かす

郷土の偉人 松浦武四郎

- ① 市民に誇りや愛着を感じてもらい、個性豊かな地域づくりに役立てる
- ② 生涯学習や、小中高生の学習において、武四郎の生き方や心を学ぶ
- ③ 武四郎にちなんだ新しい文化の創造と、心豊かな人づくりに役立てる
- ④ 松浦武四郎を通して、松阪の豊かな文化を全国へと発信する



「松浦武四郎肖像」

武四郎が65歳頃に撮影された写真で、膝のあたりまである長い首飾りは、武四郎のシンボルともいえる。勾玉など古代の玉飾りをアレンジして作ったもので、武四郎は日本でも有数の勾玉コレクターであった。



松浦武四郎の今日的意義

松浦武四郎生誕190年等記念事業実行委員会
実行委員長

三 好 孝



本日は、松浦武四郎生誕190年等記念事業のオープニングイベントへ、ようこそお越しくださいました。実行委員会を代表して、みなさまに厚くお礼を申し上げます。

近年、異文化理解、多文化共生社会といわれ、異なる文化への理解が社会的な課題となっておりますが、それにはまず、日本の歴史と文化をしっかりと理解することが大切であり、同じ日本に暮らすアイヌ民族の歴史・文化への理解が重要であることは言うまでもありません。

松浦武四郎は、今から150年も前に、本州とは異なる文化をもつアイヌの人びとと深く交流し、その文化の尊重に努め、日本が一つの民族・文化だけの国ではないことを一生懸命に訴えた人物でもあります。

この記念となる年をきっかけに、松浦武四郎の存在意義を考え、武四郎の生き方に学ぶことは、今日の松阪にとって大変有意義なことであり、個性豊かな地域づくり、新しい文化の創造へとつながるものです。

また、武四郎が日本全国を歩く中で築いた交流を、現代へとつなげていくことは、松阪が全国各地との文化交流をおこなっていくうえでも、大きな力となるものです。

松浦武四郎を多くの人々に発信することができ、この記念事業が実り多きものとなるよう、みなさまのご支援ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



松浦武四郎は 北海道との文化交流の扉を開く

松阪市長

下 村 猛

松阪市は今年、郷土が生んだ偉人松浦武四郎の生誕190年、没後120年、そして最後の北海道調査から150年という記念すべき年を迎えました。

6回にわたり北海道調査をおこなった武四郎は今、学術、観光の方面から注目されており、2007年には、札幌市で開催された松浦武四郎フォーラムをはじめ、足跡を刻んだ北海道の各地で、武四郎に関わるたくさんのシンポジウムや展覧会などのイベントが開催され、また、武四郎に関する全国的な研究調査も日本学術振興会の支援のもと始まりました。

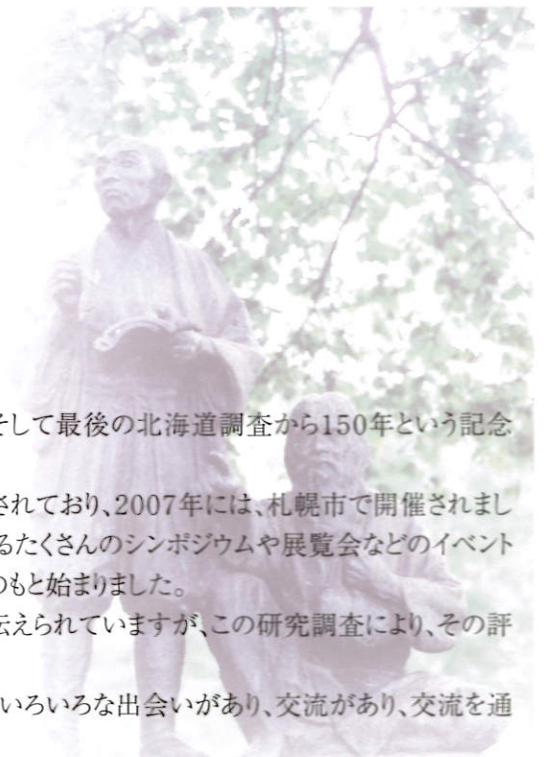
武四郎は、旅行家・探検家、作家、出版者、学者など、幅広い分野での活躍が伝えられていますが、この研究調査により、その評価がさらに高まるのではないかと、大いに期待されるところです。

武四郎が活躍した時代、旅といえば歩くということになりますが、その道中には、いろいろな出会いがあり、交流があり、交流を通して得た情報や文化をふるさとに持ち帰ることが、地域の発展につながりました。

地方分権の時代を迎えた今日、自立した地方を創るためには、それぞれの地域に息づく歴史・文化・伝統に着目した地域間交流がとても大切であると考えております。

松浦武四郎は、松阪と北海道をつなぐ大きな架け橋です。この記念事業を契機に、松阪と北海道の新たな交流が進んでいくことを、心から願っております。

本記念事業の実施にご尽力をいただいております実行委員会のみなさまをはじめ、関係者の方々に、心よりお礼を申し上げますとともに、松阪の個性ある地域づくりが市民のみなさまとの協働により、ますます進展いたしますよう、みなさまのご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。





松浦武四郎を知る！

松阪しよんがい音頭と踊り「松浦武四郎一代記」(松阪しよんがい音頭と踊り保存会)

「松阪しよんがい音頭と踊り」は、松阪地方の郷土民謡としては最も古いものとされます。

その起源は、蒲生氏郷による松阪城築城に携わった民衆の間で唄い踊られたものが始まりとされ、平成15年に松阪市無形民俗文化財に指定されました。

音頭には、明智光秀や本居宣長といった歴史上の人物に関するものなど、古今を問わずさまざまな内容が作られ、「松浦武四郎一代記」(矢津太郎作)は15番に及び唄と踊りによって武四郎の生涯を紹介するものです。



松阪しよんがい音頭と踊り「松浦武四郎一代記」
昨年秋に北海道札幌市で開かれた松浦武四郎フォーラムでも披露されました。

小野江小学校6年生による群読「松浦武四郎」

私たち小野江小学校は、松浦武四郎記念館や生家がある松阪市小野江町にあります。

そして、学校全体の取り組みとして、郷土の偉人である松浦武四郎について、学年に応じてさまざまなかたちで学んできました。

松浦武四郎は、旅行家・探検家、作家、出版者、学者など、その業績は多方面にわたっており、特に北海道の名付け親として知られていますが、私たちはアイヌの人々と交流を深めたヒューマニストとしての武四郎の姿に重点をおいて学習しております。

郷土の偉人松浦武四郎を愛すると共に、郷土を愛し、さまざまな価値観を受け入れる広い心、偏見を持たない眼、常に先を切り拓く力を、武四郎の生き方から学び、一歩でも武四郎に近づけるよう、これからも取り組んでいきたいと思っています。

今年の6年生は、「群読」を通して武四郎を紹介しようとして一生懸命練習を重ねてきました。

子どもたちの武四郎への思いを、みなさまに感じていただきたいと思います。

※群読＝一人で読んだり、大勢で読んだり、その読み方を工夫して、文章では表せないことでも、言葉によって効果的に表現する発表方法

松阪市立小野江小学校 校長 辻本 憲男

6年生 担任 坂下 幸一

池田侑里奈	北川真由	齋藤理沙	濱田雄太
伊勢野稜太	北場綾	清水実	田田悠
伊藤美波	黒宮涉吾	須崎湊	前川紗
岩見美ちえ	高麗克斗	須崎湊	山本雄
浦田拓	小林峻	須崎湊	山下達
大田佳苗	小林真太郎	富田凌	森村実
奥田健太郎	小林夏希	中林希	
川口元氣	駒田紗耶佳	中村希	
北川秀晃	駒田茉由	萩原佑華	

以上34名



小野江小学校6年生のみなさん



松浦武四郎(41歳)

安政5年(1858) 6回目の蝦夷地(北海道)調査の足跡

松浦武四郎を語る!

磯里博巳さんによるトーク「アイヌ民族から見た松浦武四郎」

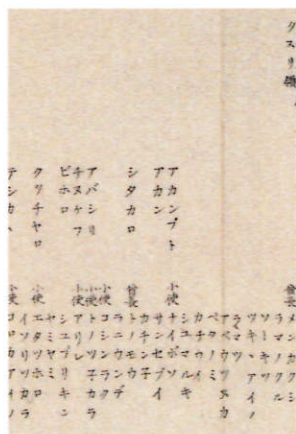
安政5年(1858)、松浦武四郎に屈斜路湖を案内したインリツカラの子孫である磯里博巳さんは、北海道でもっとも自然豊かで美しい地域と言われている大森林と湖の地、弟子屈町にある、凍結する湖としては日本最大の屈斜路湖畔のコタンで生まれました。

厳冬期には親や村の人たちが凍った湖の上に立ててくれたエゾマツの枝をたよりに、零下の世界を友達と助け合って小学校へと通い続けました。

現在は、彫刻を生業としながら、四季それぞれの自然に親しみ、カムイ(神)に感謝をささげてその恵みをいただき、150年前に祖先インリツカラが松浦武四郎を案内した地で暮らしておられます。



磯里博巳さん



「東蝦夷山川地理取調図 首」
地図の凡例とともに、武四郎を案内したアイヌの人びとの名前が記されている。その数は277名にのぼり、クスリ(釧路のこと) 領の項目にはクッチャロ(屈斜路湖畔)にインリツカラという名前が見える。



「東蝦夷山川地理取調図 十三」

武四郎は6回の蝦夷地調査の集大成として、北海道の内陸部を詳細にあらわした地図を作り、安政6年に出版した。全28冊のうち、26冊が地図で、写真はそのうちの屈斜路湖周辺の部分である。左側の湖は屈斜路湖、右側は摩周湖で、湖に流れ込む川の様子、山などの地形、数多くのアイヌ語地名があらわされるが、武四郎の調査にはアイヌ人びとの多大な協力があった。



屈斜路湖を丸木舟でゆくアイヌの人々

武四郎はインリツカラの案内で屈斜路湖を舟で渡り、その景色の美しさに感動した。それは、このような風景であったのかもしれない。

松浦武四郎とインリツカラの出会い

今から150年前の安政5年(1858)、松浦武四郎は6度目の蝦夷地(現在の北海道)調査をおこないました。

まだ雪深い1月22日(陽暦3月7日)に箱館(函館)を出発し、8月21日(陽暦9月27日)に帰るまで200日以上に及ぶ長い旅でした。

箱館を出て、噴火湾沿いに歩き洞爺湖から石狩へ出て、石狩川を遡って峠を越え、十勝川を下り太平洋側へ出ます。さらに阿寒湖、摩周湖、屈斜路湖などの内陸部を縦横に踏み分けて、釧路から海岸沿いを北上し、オホーツク海側から日本海側の西海岸へ、太平洋側へ抜けて日高沿岸の主要な川を一筋一筋遡っては戻る徹底した調査でした。

当時、幕府のお雇いであった武四郎は、この調査に出る前に上司へ、「今度の旅は氷雪の山岳を目標として踏み入るので、生命の安否もおぼつきませんが、死を覚悟して出立します。聞くとところによると、私の調査を妨害しようとする動きがあるようですが、いかなることがあろうとこの調査をやり遂げます。」と調査の予定と決意を記し、提出しました。

調査はまだ雪深いころの出発で困難を極め、大変な苦労の連続でした。

そして、4月10日(陽暦5月21日)にクッチャロ(釧路川の源流にあたる屈斜路湖畔)に着きます。そこには7軒の住居(チセ)がありました。

武四郎は湖畔に立ち、そのあまりの美しい景色に「風景言ん方なし」と絶賛しました。

武四郎の自伝には、「舟を雇て湖中見学、水先インリツカラ」とあり、舟に揺られながら武四郎は、「汐ならぬ 久寿里の湖に舟うけて 身も若がえる こちこそすれ」と和歌を詠み、旅の疲れを忘れるほどの気分であったようです。

インリツカラの名前は、武四郎の作った地図「東蝦夷山川地理取調図」の案内をしたアイヌの人びとの名前を記した一覧の中にも見ることができます。



松浦武四郎を偲ぶ!

鷗川アイヌ文化伝承保存会 国指定重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」

鷗川アイヌ文化伝承保存会

会長 佐渡 日出男 会員 56人

出演者 佐渡日出男 木下梅雄 木下信子 押野朱美 押野里架 小石川みどり
竹中ちづ子 片山弘子 柴原弘美 長曽和子 尾上千鶴子 長門ワカ子
泉 テル 本間英子 新田増美 押野千恵子

昭和55年 2月 5日 鷗川アイヌ無形文化伝承保存会発足
平成 5年 3月 5日 鷗川アイヌ文化伝承保存会に名称変更
平成 6年12月21日 国の「重要無形民俗文化財保護団体」の指定を受ける
平成10年10月17日 国際民俗芸能フェスティバル(山形市)で文化庁長官より感謝状授与
平成14年10月20日 (財)アイヌ文化振興・研究推進機構の「アイヌ文化奨励賞」を受賞
平成19年10月26日 第43回北海道文化財保護功労者賞受賞



鷗川アイヌ文化伝承保存会 アイヌ古式舞踊

武四郎が調査をおこなった150年前に北海道各地で見たであろう踊りは、今も大切に各地域で受け継がれている。



「蝦夷漫画」に描かれたアイヌの踊り

松浦武四郎はアイヌ文化を広く知ってもらうため、自ら描いた絵に解説をつけた「蝦夷漫画」を安政6年(1859)に出版している。写真は、「鶴の舞」を描いたもので、アイヌの人びとがイナウ(木幣)を中心にして、男女や年齢に関係なくみんなで踊るさまが描かれており、踊りは片足をあげ、両手を広げて、鶴が羽ばたくさまをあらわしている。

アイヌ古式舞踊

アイヌ民族の儀礼や踊りは、古くから伝えられてきたものです。

狩猟や漁労、採集を生活の基盤としていたアイヌの人びとは、山や川や鳥や動物など自然のあらゆるものの中に精霊の存在を信じた。アイヌの人びとは自然に対して親密であり、木を乱伐したり魚を乱獲したりはせず、自然を友とし、自然への対話を通して数々の歌と踊りを生み出してきました。

祭事や祝事には、イナウ(木を削ってつくる幣)やお酒とともに絶対なくてはならないものが歌や踊りであり、歌(ウポポ)も踊り(リムセ)も、集まって来た人びとが、互いに一つの雰囲気にならぬもので、その中でも一列に円陣を作り、「アーホイヤ、ホーホイ」というようにはやしながらかき、少しひざを曲げて、腰を浮かせて上下しながら足を左へ小さく運んだものが、最も古い踊りの形であると言われています。

また、アイヌの人びとの歌や踊りは西洋舞踊や日本舞踊のように華やかな舞台で観客を楽しませるものとは異なり、生命を脅かす悪魔を遠ざけ、よい神々の助けを求め、狩猟や漁労を基盤とする生活を通して生きるための願いそのものを根元としました。

長い狩猟生活からは、鶴の歌舞、狐の歌舞などが生まれ、あるいは舟こぎ歌のように漁労と関係のある舞踊や、室内での生活を元にして生まれたものから、さらに集落(コタン)間で争いが起こったとき、守り神への戦勝祈願の歌や踊り、勝利のときの守り神への感謝の踊りなど、さまざまな踊りがあります。

100年程前から出来上がったと言われる歌と踊りは、アイヌ民族独自の信仰に根ざしているもので、信仰と芸能と生活が密着していたころの姿をしのばせています。

松浦武四郎とは(1)

松浦武四郎は、文化15年(1818)2月6日に伊勢国一志郡須川村(現在の松阪市小野江町)で生まれ、明治21年(1888)年2月10日に東京の神田五軒町でその生涯を閉じました(享年71歳)。

武四郎の蝦夷地調査

幕末から明治維新という激動の時代に生きた武四郎は、若い頃から全国各地を旅して回りますが、やがて、開国を求めて迫るアメリカ、ロシアなど諸外国の動きに日本の将来を憂い、海防の要所とされた蝦夷地(今の北海道)の様子を明らかにし、多くの人びとに伝えようと決意しました。

武四郎の蝦夷地探査は6度にも及びましたが、その成果を探査の詳細な記録「日誌」としてまとめ、幕府へと提出し、一方で、一般の人びとへも読みやすいように工夫した紀行文を著したほか、内陸部を詳細に示した地図を作成し、次々と出版していきました。

こうした出版活動によって、当時の京都や江戸(今の東京)などで暮らす人びとは、遠い蝦夷地の様子や、文化の異なるアイヌ民族の暮らしを知ることができたのです。



「野帳」

武四郎が調査で歩きながら記録した手のひら大のメモ帳。北海道各地で見聞した情報をその場で書き留めた貴重なもので、武四郎は調査後に調査メモを整理し、日誌としてまとめた。

「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」

今から150年前におこなった6回目の調査成果をまとめた日誌(調査記録)は62冊に及び、各地の様子を詳細に記録した資料として価値が高い。



アイヌ民族の良き理解者として

武四郎の蝦夷地調査は、たった一人の力で成し遂げることができたわけではありません。各地で暮らすアイヌ民族の協力があってこそ、六度もの調査をおこなうことができました。

武四郎は調査を通じてアイヌ文化に触れ、アイヌの人びとを尊重する良き理解者でありました。



「北蝦夷余誌」

北蝦夷とは蝦夷地の北、つまりサハリン(樺太)の江戸幕府による公称。武四郎は、二回目、四回目の調査でサハリンに渡り、その紀行を豊富な挿絵とともにわかりやすくまとめて、安政7年(1860)に出版した。写真左側には武四郎と案内するサハリン南部のアイヌ民族、右側にはウィルタ、ニヴフといったサハリン中部以北で暮らす民族が描かれている。

「蝦夷漫画」にみえるアイヌ民族の楽器

松浦武四郎がアイヌ文化を正しく伝えるために描いた「蝦夷漫画」には、ムックリ(口琴)の他に、トンコリ(五弦の琴)と呼ばれる弦楽器や、トの皮を張った太鼓、くるみの木の皮を巻いて作った笛などがみえる。樹皮から繊維をとる様子や糸を作るのに必要な道具などが描かれている。



明治政府での武四郎

明治維新を迎え、もっとも蝦夷地に詳しい人物と評価をされていた武四郎は、大久保利通の推挙もあり、政府へ登用されて開拓判官に任じられます。武四郎は、蝦夷地を改称する案として、「北のアイヌ民族が暮らす大地」という思いを込めた「北加伊道」などをあげ、この案に基づき政府で検討された結果、「北加伊道」は「北海道」に字を改め、明治2年(1869)8月15日、「蝦夷地」は「北海道」に改称されました。また、北海道の国名(現在の支庁名にあたる)、郡名も武四郎の案に基づいて決められており、「北海道の名付け親」と呼ばれてきた所以がここにあります。



「北海道道名撰定上申書」(写)

明治2年7月に「蝦夷地道名之儀勘弁申上候書付」として明治政府へ提出されたものの写しで、武四郎が考えた6つの案をもとに検討され、8月15日に北海道と改称された。武四郎の案には「北加伊道」とあり、「カイ」という言葉はアイヌ語でアイヌ民族を指しているとされ、アイヌの人びとが暮らす大地という思いで考えられた名前であったことがわかる。

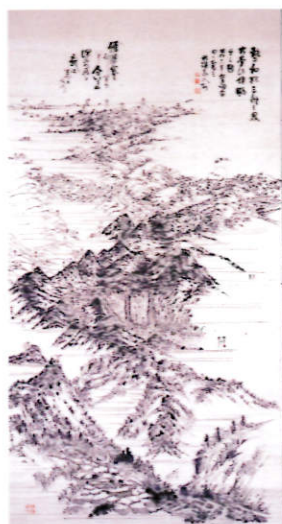
「北海道国郡図」

明治2年、「北海道」と改称されて開拓使から出版された地図。上が南、下が北を指し、北海道、樺太、千島列島を示す。地図は松浦武四郎の作で、左上の「寧静致遠」の題字は民部卿伊達宗城(旧宇和島藩主)、漢詩は初代開拓使長官鍋島直正(旧佐賀藩主)、和歌は二代目長官東久世通禧(公家)によるもの。





松浦武四郎とは(2)



さまざまな顔をもつ

武四郎の生涯は、全国各地をめぐる旅、六度に及ぶ北海道調査、68歳からは大台ヶ原に登り、70歳で富士山に登るなど、まさに旅そのものであったと言っても過言ではありません。

そして、旅の中で全国各地の文化に触れ、多くの人びとと交流し、その土地のことを記録しているところからは、旅行家・探検家だけでなく、多くの著作を著した作家であり、自ら出版を手がけた出版者であり、学者であり…数えればキリがないほどさまざまな顔を持っていることがわかります。

「大台山頂眺望図」

武四郎が初めて大台ヶ原に登山した後に描いた鳥瞰図。武四郎の絵の技術の高さを知ることができるが、鳥か飛行機で上から眺めたかのように的確に地形を把握し、それを一枚の図に表現している。

「撥雲余興」

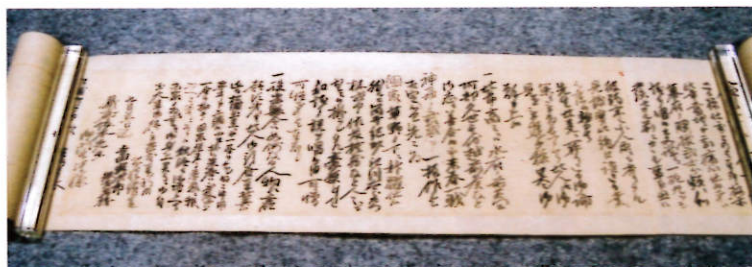
武四郎は、土中から掘り出される石器や土器、装飾品などを次々に集め、貴重な資料の図録を作り、「撥雲余興」と題して出版した。



多彩な交友関係

武四郎は交友関係も多彩です。

吉田松陰や頼三樹三郎、藤田東湖といった幕末の志士、大久保利通、木戸孝允など明治維新の傑人、富岡鉄斎や河鍋暁斎といった画家、日下部鳴鶴、巖谷一六といった書家など、実に様々な分野の人々と交流をもっていたことが、松浦武四郎記念館に収蔵されている資料からわかります。



「吉田松陰書簡」

嘉永6年(1853)年9月5日付の吉田松陰の手紙。大阪の砲術家坂本鼎齋に、武四郎を紹介するための手紙で、武四郎はこの手紙を持って大阪へ行くが、鼎齋には会えず手紙だけが手元に残った。松陰が書中で、「幕府ノ腰拔武士が頼二和議ヲ唱候事…」と記しているのは、この年の6月にアメリカ提督ペリーが浦賀へ来航、七月にはロシア使節プチャーチンが長崎に来航したことを受け、動揺し開国へと傾く幕府を痛烈に批判したもの。武四郎は松陰と海防問題について議論するなど親しく交流していた。

今に生きる武四郎

今を生きる私たちにとって、武四郎とはどのような存在なのでしょう。

北海道を六度にわたり調査した探検家とか、北海道の名付け親とか、いろいろな呼び方ができますが、単に過去にこのようなことをおこなった人物、というだけではありません。

武四郎が生きた江戸時代は、武士を頂点とする社会であり、誰もが平等ではありませんでした。そのような時代に、武四郎はアイヌの人びとへの正しい理解と、文化を尊重することを、命をかけて訴えています。

多様な価値観を受け入れ、不正を許さず、自らの信念に基づいて行動した姿は、今の私たちがあるべき姿でもあり、今から150年前に生きた武四郎の姿が、色褪せることはありません。

武四郎の天神信仰

松浦武四郎は晩年、学問の神様として知られる菅原道真を信仰しました。

武四郎は、明治8年(1875)に北野天満宮(京都)へ直径約1メートル、重さ約120キログラムもある巨大な銅鏡を奉納したのをはじめ、明治9年上野東照宮(東京)、明治12年大阪天満宮、明治13年金峯山寺蔵王堂(奈良吉野)、明治15年太宰府天満宮(福岡)に次々と大きな鏡を作らせて、多くの人びとの協力を得て奉納していきました。

その後も武四郎は、直径が約30センチメートルの小型の銅鏡を作り、道真ゆかりの数字25にちなんで、ゆかりの深い



「近世蝦夷人物誌」

武四郎は、本州の人びとにアイヌ民族への正しい理解を求めるため、出会ったアイヌの人びとから聞いた話をありのままに記した。近世ルポルタージュの最高峰と評され、平凡社ライブラリーから「アイヌ人物誌」という題で現代語訳が出版されている。

松浦武四郎とは(3)

25カ所の天満宮に奉納し、境内に石標を建てたほか、明治19年には「^{せいせき に じゅう ご れい しや じゅんぱい ずく}聖跡二十五霊社順拝双六」を出版し、菅原道真の事績と、25カ所の天満宮を紹介することに努めました。



きた の てん まん ぐう ほう のう しん きょうはい ゆん たく ほん
「北野天満宮奉納神鏡背面拓本」

武四郎が明治八年に北野天満宮に奉納した巨大な銅鏡の拓本。裏面に北海道、サハリン(樺太)南部、千島列島というアイヌの人びとが暮らす地域をデザインしている。これは、戦国武将加藤清正が北野天満宮に奉納したほぼ同じ大きさの「日本地図鏡」の裏面のデザインが、青森まででその北がなかったためとされるが、銅鏡を奉納した武四郎はアイヌの人びとの平安を祈った。

せいせき に じゅう ご れい しや じゅんぱい ずく
「聖跡二十五霊社順拝双六」

明治19年に武四郎が出版したこの双六は、菅原道真の事績と、ゆかりのある25の天満宮を紹介するものでした。



武四郎の書斎「一畳敷」

65歳を過ぎてから足腰の衰えを感じていた武四郎は、今までの旅の生涯を思い出す場所を作るため、東京の自宅に畳一畳の書斎を増築しました。

この書斎は、武四郎が若い頃から全国各地を訪れて、交流した人びとに頼んで、それぞれの土地で有名な古いお寺や神社の古材を贈ってもらい、それを組み合わせて作ったもので、北は宮城県、南は宮崎県から古材が寄せられました。

武四郎は、これまでの旅の人生を思い出す場所としてこの畳一畳の書斎を作り、畳の上で、あれは若いときの旅で訪れたあの神社から、これはあの時に知り合ったあの人から贈ってもらったものだ、思い出を振り返り、夏になればその部屋一杯に蚊帳を吊って寝起きし、来客があるとこの狭い書斎に招き入れ、懐かしそうに古材の由来を語ったといわれています。



一畳敷の書斎

(写真提供 国際基督教大学)

建築史上、大変珍しいこの書斎は、武四郎没後、紀州徳川家当主、日産自動車重役、中島飛行機社長と所有者が変わり、現在は東京都三鷹市にある国際基督教大学敷地内の庭園「泰山荘」内に現存。この書斎の素晴らしさに注目し、その存在と一点一点の部材の由来を紹介したのは、同大学の教授を務めたヘンリー・スミス博士であった。

もくへんかんじん
「木片勸進」

武四郎は古材の由来と、それぞれがどのように使われているかを詳細に記録した「木片勸進」という本を明治20(1887)に出版する。その跋文には、「草の舎のあるじ」とあり、武四郎がこの一畳の書斎を「草の舎」と名づけたことがわかる。



武四郎の旅と松阪

松阪は、大淀三千風、本居宣長、松浦武四郎など、三重県が誇る偉人を数多く輩出していますが、松阪の地に大きな影響を与えたのは伊勢神宮へとつながる「道」でした。

松阪には、南北に伊勢街道(参宮街道)が貫いているほか、和歌山と松阪を結ぶ和歌山街道や、奈良と伊勢を結ぶ初瀬街道があり、多くの人びとが行き交い、物資や情報の流通がありました。

大淀三千風は射和(松阪市射和町)を出て、街道を歩いて全国をめぐり、俳句の世界に大きな足跡を残しました。

本居宣長は松阪で国学を研究しましたが、宣長のもとを訪れた学者たちは街道を通り松阪へやって来ることで、学問の交流が深められました。

松浦武四郎は伊勢街道に沿って自宅があったため、少年時代に街道を行くお陰参りの旅人に大きな刺激を受け、自分も全国各地を見て回ろうと旅を志しました。

松浦武四郎が成長していく上で、「道」はとても大きな影響を与えました。

道にはじまり、道なき道を歩き、道をつくった松浦武四郎。

武四郎を育てた土壌はふるさとである、この松阪の地にあるのです。



松阪市指定史跡「松浦武四郎誕生地」

武四郎はこの地で生まれ育っており、16歳での江戸への一人旅、28歳からの北海道探査など、武四郎の旅の原点がここにある。



松浦武四郎の生涯とその時代

諸国遍歴時代

※武四郎の年齢はすべて数え年(生まれた年を1歳として数えた年齢)です。

西暦	年号	日本の主な出来事	武四郎の主な出来事	年齢
1818	文政元	伊能忠敬没	松浦時春(桂介)の四男として竹四郎誕生	1歳
1821	文政4	「大日本沿海輿地全図」完成		4歳
1824	文政7		近くの寺で読み書きを習う、「名所図会」を愛読	7歳
1825	文政8	異国船打払令		8歳
1828	文政11	シーボルト事件		11歳
1830	天保元	文政のおかげ参り	津藩平松楽斎の私塾に学ぶ(～16歳)	13歳
1833	天保4	天保の大飢饉(～39)	手紙をのこし突然家出→江戸で見つかり連れ戻される	16歳
1834	天保5	水野忠邦老中就任	全国を回る旅に出る。近畿→中国→四国→近畿	17歳
1835	天保6		近畿→北陸→甲信越→東北→関東→中部→近畿→四国	18歳
1836	天保7		四国八十八ヶ所霊場巡礼→近畿→山陰→山陽(鞆の浦)	19歳
1837	天保8	大塩平八郎の乱、モリソン号事件	山陽→九州一周	20歳
1838	天保9		長崎で大病、出家し僧侶「文柱」となる	21歳
1839	天保10	蛭社の獄(渡辺崋山、高野長英ら逮捕)	平戸の寺で住職を務める(3年間)	22歳
1840	天保11	清、イギリスとアヘン戦争(～42)	↓	23歳
1841	天保12	天保の改革(水野忠邦)	↓	24歳
1842	天保13	天保の薪水給与令	対馬から朝鮮半島へ渡ろうとしたが果たせず	25歳
1843	天保14	老中阿部正弘	長崎でロシア南下の危機を知り、一転蝦夷地を目指す、郷里へ戻り参宮と父母の墓に参る、「西海雑誌」を著す	26歳
1844	弘化元	フランス船琉球来航、オランダ国王開国勧告	郷里で「四国遍路道中雑誌」を執筆、青森鰺ヶ沢まで行き蝦夷地を目指す、松前藩の取締りが厳しく果たせず	27歳

蝦夷地調査時代

西暦	年号	日本の主な出来事	武四郎の主な出来事	年齢
1845	弘化2	イギリス船琉球来航	第1回蝦夷地探査。商人和賀屋孫兵衛の手代に身を変え、函館→森→有珠→室蘭→襟裳→釧路→厚岸→知床→根室→函館	28歳
1846	弘化3	米使ビッドル浦賀来航	第2回蝦夷地探査。松前藩医西川春庵の下僕「雲平」として、江差→宗谷→樺太→宗谷→紋別→知床→宗谷→石狩→千歳→江差、江差では志士頼三樹三郎と「一日百印百詩の会」を催す	29歳
1849	嘉永2	嶺田楓江「海外新話」(アヘン戦争を記す)を著し、幕府より絶版、江戸から追放	第3回蝦夷地探査。函館から船で国後島、択捉島へ	32歳
1850	嘉永3		「初航蝦夷地誌」全12冊・「再航蝦夷地誌」全14冊・「三航蝦夷地誌」全8冊が完成、「蝦夷大概図」・「新葉和歌集」を出版	33歳
1851	嘉永4		「蝦夷沿革図」・「表忠崇義集」を出版、「断壁残圭」・「盡微問答」・「婆心録」を復刻	34歳
1853	嘉永6	6月アメリカのペリー浦賀に来航、7月ロシアのプチャーチン長崎に来航	吉田松陰と海防問題を語り合う、「読史贅議」を復刻	36歳
1854	安政元	ペリー再航、日米和親条約、日露和親条約(幕府は日露国境の画定を迫られる)	宇和島藩の依頼により下田でペリー一行の様子を調査(「下田日誌」)、「壺の石(蝦夷地)」を出版	37歳
1855	安政2	蝦夷地を松前藩領から幕府に再直轄、日蘭和親条約	幕府から蝦夷地御用御雇の命を受ける、「後方羊蹄路志」・「於幾能以志」を出版	38歳
1856	安政3	アメリカ総領事ハリス着任	第4回蝦夷地探査。函館→宗谷→樺太→宗谷→函館、「箱館往来」を出版	39歳
1857	安政4	下田協約調印	第5回蝦夷地探査。函館→石狩→上川→天塩→函館、「蝦夷葉那誌」・「新選末和留辺志」を出版	40歳
1858	安政5	日米修好通商条約、井伊直弼による安政の大獄(～59)	第6回蝦夷地探査。北海道全ての海岸→十勝→阿寒→日高、「近世蝦夷人物誌」の出版が許可されず、「壺の石(北蝦夷地)」を出版	41歳
1859	安政6	安政の大獄により、吉田松陰、頼三樹三郎ら死刑	「按西・按東・按北鷹徒録」全32冊・「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌」全23冊・「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」全62冊が完成、「東西蝦夷山川地理取調図」全28冊・「蝦夷漫画」・「蝦夷地名奈留辺志」を出版	42歳
1860	万延元	勝海舟ら咸臨丸で太平洋横断、桜田門外の変で井伊直弼暗殺	「北蝦夷余誌」・「蝦夷蘭境山川地理取調大概図」を出版	43歳
1861	文久元	皇女和宮が將軍家茂へ降嫁	「後方羊蹄日誌」・「石狩日誌」・「久摺日誌」・「十勝日誌」を出版	44歳
1862	文久2	坂下門外の変	「夕張日誌」を出版	45歳
1863	文久3	薩英戦争	「納沙布日誌」・「知床日誌」・「天塩日誌」を出版	46歳
1864	元治元	四国連合艦隊が下関砲撃、幕府第一次長州征討	「鴨津頼先生一日百詩」・「新板蝦夷土産道中寿五六」・「新板箱館道中名所寿語六」を出版	47歳
1865	慶応元	第二次長州征討	「西蝦夷日誌初編」・「同二編」・「東蝦夷日誌初編」・「同二編」を出版	48歳
1867	慶応3	10月大政奉還、12月王政復古の大号令		50歳

明治政府開拓使時代

西 暦	年 号	日本の主な出来事	武四郎の主な出来事	年 齢
1868	慶応4=明治元	1月鳥羽伏見の戦(戊辰戦争)、3月神仏分離令(廃仏毀釈運動)、4月江戸開城、	閏4月上京の召書、東海道間道調べ、任徴士箱館府判官事	51歳
1869	明治2	1月版籍奉還上奏、3月東京遷都、5月榎本武揚ら箱館で降伏(戊辰戦争終了)、8月蝦夷地を北海道と改称	任開拓判官、道名・国名・郡名撰定に尽力、叙従五位、「蝦夷誌」を復刻、「北海道国郡図」・「北海道国郡略図」・「千島一覽扇面」・「西蝦夷日誌三編」・「東蝦夷日誌三編」・「同四編」を出版	52歳
1870	明治3		開拓判官辞職(従五位返上)、「蝦夷年代記」・「壺乃碑考」・「林氏雜纂」・「千島一覽」・「西蝦夷日誌四編」・「東蝦夷日記五編」を出版	53歳

晩年

西 暦	年 号	日本の主な出来事	武四郎の主な出来事	年 齢
1871	明治4	寺領上知の令、廃藩置県、日清修好条規調印	「竹島雑誌」・「読史贅議逸編」・「西蝦夷日誌五編」・「東蝦夷日誌六編」を出版	54歳
1872	明治5	学制公布、新橋・横浜間鉄道開通	「百蟲行」・「西蝦夷日誌六編」を出版	55歳
1873	明治6	徴兵令、地租改正条例、征韓論敗れる	伊勢度会県博覧会へ出品、岩倉具視邸内の長屋から神田五軒町へ引越し書画会を開く、「東蝦夷日誌七編」を出版	56歳
1874	明治7	佐賀の乱(島義勇死刑)		57歳
1875	明治8	樺太・千島交換条約、江華島事件	北野天満宮へ大神鏡を奉納	58歳
1876	明治9	日朝修好条規締結	上野東照宮へ大神鏡を奉納、「馬角齋茶余」を出版	59歳
1877	明治10	西南戦争、モースが大森貝塚発掘	考古図録といえる「撥雲余興」を出版	60歳
1878	明治11	大久保利通暗殺	「新獲小集」・「東蝦夷日誌八編」を出版	61歳
1879	明治12	教育令公布、沖縄県設置(琉球処分)	大阪天満宮へ大神鏡を奉納、妻と京都・吉野漫遊、「尚古杜多」(同題で二種類)を出版	62歳
1880	明治13	国会期成同盟結成	金峯山神社へ大神鏡を奉納、「そめかみ」・「松のけぶり」・「庚辰遊記」を出版	63歳
1881	明治14	国会開設勅諭、明治十四年の政変、自由党結成、松方財政、開拓使官有物払下事件	「辛巳遊記」を出版	64歳
1882	明治15	井上馨が条約改正交渉、立憲改進黨・立憲帝政党結成、日本銀行設立	太宰府天満宮へ大神鏡を奉納、「撥雲余興二集」・「壬午遊記」を出版	65歳
1883	明治16	徴兵令改正、岩倉具視没	三井寺に鍋塚建立、熊本・宮崎を漫遊、「癸未冥志」・「癸未冥誌」を出版	66歳
1884	明治17	松方デフレで不況、秩父事件	高野山の骨堂に抜けた髪や歯を納め、近畿地方を巡る、「甲申小記」を出版	67歳
1885	明治18	天津条約調印、大阪事件、内閣制度創設	1月までに25霊社へ小神鏡と石標奉納、第1回大台ヶ原探査、「乙酉掌記」・「乙酉後記」を出版	68歳
1886	明治19	学校令公布、北海道庁設置、星亨ら大同団結運動提唱	第2回大台ヶ原探査、「聖跡二十五霊社順拝双六」・「丙戌前誌」・「丙戌後記」を出版	69歳
1887	明治20	伊藤博文が憲法起草開始、保安条例公布(570名が東京追放)	第3回大台ヶ原探査、東海・近畿・四国・山陽・九州を回る、富士登山、畳一畳の書斎を作る、「木片勸進」・「丁亥前記」・「丁亥後記」を出版	70歳
1888	明治21	市制・町村制公布、樞密院設置、	叙従五位、2月10日没、浅草称福寺に墓所(現在は東京染井墓地に移る)、明治22年に大台ヶ原へ追悼碑(分骨碑)が建立される	71歳

松浦武四郎生誕190年等記念事業実行委員会

実行委員会では、松浦武四郎とはどんな人物かを知ることから会議が始まりました。

以後、まず松阪、そして三重県のみなさんに松浦武四郎という人物の素晴らしさを知っていただき、全国へと武四郎を発信していくことを目指して、この記念事業を推進する実行組織として活動しています。



「実行委員会の様子」

松浦武四郎のことを多くの人びとに知っていただくためには、どのようなことをおこなえばいいかを話し合っています。

実行委員長

三 好 孝

副実行委員長

中 村 文 恵

山 本 坦

実 行 委 員

安 西 洋 子

伊 藤 義 徳

門 暉代司

坂 井 文

佐 波 早 苗

庄 司 佳 伸

辻 本 憲 男

吉 田 正 博

米 山 哲 司

飯 田 秀

大 井 兵 衛

斎 藤 清 治

佐 藤 貞 夫

清 水 哲 夫

高 木 宏 和

深 田 憲 一

米 本 一 美

(五十音順)

江戸時代、はるか北方をめざし、真摯なまなざしで真実を見つめた男がいた。

幕末から明治維新に活躍した松浦武四郎は、生涯にわたり全国を歩き続けた。

探検家、作家、出版者、学者…

たぐいまれなる知識欲と冒険心で、多芸多才ぶりを発揮したが、
数々の業績の中で人びとの記憶に刻み込まれているのは、「北海道の名付け親」であること。

さまざまな価値観を受け入れる広い心、偏見を持たない眼、常に先を切り拓く力…
ひとりの歩みが大きな足跡となった。



■松浦武四郎記念館

松尾芭蕉、本居宣長と並び、三重県が生んだ偉人のひとり松浦武四郎。

武四郎の生誕地松阪市小野江町にある松浦武四郎記念館では、平成6年7月の開館以来、松浦武四郎関係資料の収集保管、調査研究、展示公開、教育普及などの博物館活動をおこなっており、展示室では、様々なテーマで展示替えを行い、武四郎の姿を紹介しています。

松浦武四郎生誕190年等記念事業 オープニングイベント記念冊子

発行 者 松浦武四郎生誕190年等記念事業実行委員会
発行年月 平成20年2月

〒515-2109 三重県松阪市小野江町383 松浦武四郎記念館内
TEL.0598-56-6847 FAX.0598-56-7328